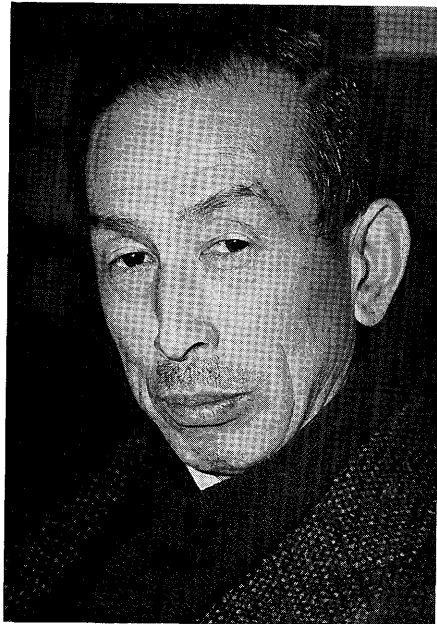


引用文献

- 大場秀章 1989a. 秘境・崑崙山に行く 岩波書店
 —1989b. 崑崙山脈の植物 プランタ No. 2 : 21-28.
 —1989c. 世界一標高の高い砂漠—アルチン山自然保護区 採集と飼育 51 : 184-187.
 新疆八一農学院 1982-85. 新疆植物検索表 全3冊
 新疆人民出版社. Collegium Agriculaturae Aug. 1
 Xinjiangense (ed.) 1982-85. Claves Plantarum Xin-
 jiangensium. 3 vols. Editio Popularis Xinjiangensis.
 鄭度 (Zheng D.), 幡裕生 (Pan Y. S.), 武素功

- (Wu S. G.), 張青松 (Zhang Q. S.) 1989. 崑崙山
 山区総合科学考察的新発展 (Recent progresses of
 the Integrated Scientific Expedition to the Kunlun
 Mountains). 山地研究 (Mountain Research) 7 :
 11-115.
 張立運 (Zhang L. Y.), 張希明 (Zhang X. M.)
 1986. 東崑崙山内庫木庫里盆地高寒草原の一般特
 征 (General characteristics of Gaosai steppe in the
 Cumcule Basin of the eastern Kunlun Mts.) 干旱区
 研究 (Arid Zone Research) 3 : 59-65.

追悼



Y. Kobayasi

小林義雄氏をいたむ

Dr. Yosio KOBAYASI 1907-1993

本誌編集員小林義雄博士は今年1月6日急性心不全のため逝去されました。享年87。謹んで御冥福をお祈りいたします。

明治40年(1907)5月17日出生, 本籍は東京市浜松町4丁目。当時熊本大林区署(今の営林局)に勤務されていたお父様の任地熊本市出京町で生まれた。

4歳の時から東京へ帰り, 根岸小学校・府立第5中学校・第1高等学校理科甲類を経て, 昭和6年(1931)東京帝国大学理学部植物学科を卒業。同年9月東京文理科大学助手に任官, 同8年講師になった。

昭和15年(1940)菌類の論文で理学博士。同16年(1941)文理大を退官して, 新設の満州国立博物館薦任官となった。間もなく太平洋戦争開戦。

昭和20年(1945)終戦と共に博物館は自然消滅。同22年(1947)帰国、東京科学博物館研究官に任官。同47年(1972)65歳で同館(その頃は改称して国立科学博物館)を退官、名誉館員になった。

小林君と私とは東大理植物へ共に昭和3年(1928)入学、3年間机を並べたが、田舎出の私は彼に学ぶことが多かった。彼は菌類志望、私はシダだったので、実習旅行以外共に行動する機会は案外少ない。1年生の夏に尾瀬へ行ったのが最初で、その後は遠出の記憶がない。日光湯元から切込刈込を経て八丁湯、翌日は鬼怒沼・尾瀬沼・長蔵小屋、次の日初体験の高層湿原尾瀬原(当時は木道のない所が多かった)をずぶずぶ、山の端・戸倉・白根温泉、翌日丸沼・菅沼・金精峠・湯元と続いて帰京した。実はこの時は急ぎの用があったので、至佛山へ登るといふ小林君と山の端小屋の所で分かれて一人旅になったが、その日一日途中で全く人に会わなかった(現在の尾瀬と大違い)。

昭和6年(1931)卒業の直前小林君は東京文理科大学の助手に内定した。そのころは飛行機による太平洋横断はまだ冒険だった時代で、報知新聞社が北太平洋の島伝いの飛行を計画した。その地上勤務員を運ぶ小さいトロール船に便乗できるといふ話を聞き彼は早速申し込んだ。4月から8月の5ヶ月間で、行き先はカムチャツカ半島・コマンドルスキー諸島・アリューシャン列島(アツ島・アトカ島・ウナラスカ島)であった。この時の旅行記(昭和6年)と植物相の記録(同9年)を報告している。

昭和11年(1936)南硫黄島、ミクロネシア(サイパン・トラック・ポナペ)、小笠原諸島へ。同12年、小笠原の発光菌類について発表。同13年南カラフト(落合・突阻山・敷香・多来加湖)へ。

昭和12年~16年(1937~1941)次々と論文を発表した。東京文理科大学理科紀要の50, 64, 70, 74, 84の各号に、担子菌類のククラケ類・シロククラケ類・テキキン類・セミタケ類(何れも欧文)を、大日本植物誌にヒメノガスター類とスッポンタケ類を書いた。その他に小笠原の発光

菌類・蟬類寄生菌類・北極その自然と生物、などがある。

戦時中は満州に居たが、この間には長白山(白頭山)、完達嶺(東満州)方面の調査を行ない、著書には「北極その自然と生物」がある。

終戦帰国後しばらく経った昭和26年(1951)には長尾研究所主任研究員を兼任して酵母やカビの研究を始め、同31年(1956)には同志と共に日本菌学会を創立、同38年(1963)には自宅内に研究室を作り、「今後10年間に海外調査を10回行なう」と宣言した。

10年計画の最初昭和38年(1963)は、冬から翌39年にかけて東オーストラリア・タスマニア・ニュージーランド・フィジー・南極・東部ニューギニアへ。39年夏には台湾へ。同40年(1965)の夏はアラスカ極地圏・カナダ西部太平洋岸へ。同41年(1966)の春はマレーシア・ボルネオ(キナバル山など)、夏はスカンジナビア半島の北極圏・スピッツベルゲン島。同42年(1967)の夏はアラスカ北極圏・北米西部へ。(この年共著で、アラスカ極地圏の菌類についての報告を発表した)。同43年(1968)の夏もアラスカとカナダの極地・アイスランド・グリーンランド東岸へ。(この年日本菌学会々長に就任)。同44年(1969)年末に東部ニューギニア(ウィルヘルム山4,700mなど)・ソロモン諸島へ。同45年(1970)昨年に続き東部ニューギニア・オーストラリア(シドニー・パース)・ジャワへ。同46年(1971)夏エジプト・スイスの高山帯へ、冬東部ニューギニア(ハーゲン山4,000m、山中で負傷)へ。(この年英国で開かれた第1回国際菌学会に代表として出席)。同47年(1972)10回計画は見事達成された。(この年国際菌学連盟IMAの副総裁に就任。随想録「分裂子」を出版)。ところが翌48年病氣を得て1年間静養することになった。

昭和49年(1974)67歳で第2回の10年計画を始めた。この年はアフリカ赤道直下のルエンゾリ山・キリマンジャロ山)・セイシェル島・セイロン島へ。同50年(1975)にはアルメニア・中央アジア・バイカル湖などへ。同51年(1976)は旅行を休む。(半自叙伝「故旧忘れ得ず」を出

版). 同 52 年 (1977) はメキシコ (ポポカテペドル山など) ・グランドキャニオンへ. 同 53 年 (1978) 南アメリカ南端のフェゴ島からパタゴニア・アコンカグア山・リマ・マチュピチュなど南米縦断を遂げ, イースター島へも. (この年 71 歳, 勲 3 等に叙せられた). 同 54 年 (1979) にはネパール (チベット国境まで) ・台湾へ. 同 55 年 (1980) にはインドネシア (バリ島・ジャワ島) ・アラスカ・アリュージョン (50 年ぶりのウナラスカ島) へ. 同 56 年 (1981) には台湾・ヨーロッパ各地へ. 同 57 年 (1982) にも台湾へ. (菌学会名誉会員になる. 各虫夏草の研究が完了). 同 58 年 (1983) 夏ヨーロッパ各地, 冬台湾蘭礁島へ. (「日本・中国菌類歴史と民俗学」, 「冬虫夏

草図譜」出版). 同 59 年 (1984) 冬台湾へ. (「続分裂子」, 「世界の顕微鏡の歴史」出版). 同 60 年 (1985) 上海・武漢・北京へ. 同 61 年 (1986) 台湾へ. 同 62 年 (1987) (「北極より南極まで——世界の山々と島々の紀行」を出版).

平成 5 年 (1993) 随筆「筆のすさび」これは生前書き遺された原稿を遺族の方が編集されたもの.

以上小林氏が 50 数年にわたって踏破し調査研究した地域は, 極地から熱帯まで 5 大陸すべてに及んでいる. 私は到底彼には適わない. 敬服するばかりである.

Dr. Yosio KOBAYASI, a member of the editorial board of the Journal, has passed away on January 6th, 1993 at the age of 87. (伊藤 洋)

新刊

□小田好道: 山県草木志 末田 尚 解題・翻刻. 安藤久次 植物解説. 広島市立中央図書館編集. A4 版. 299pp. 1992., 広島県山県郡の医者であり博物学者であった小野好道が, 安永 2 年 (1780) に執筆して広島藩に献上したもので, 市立中央図書館の浅野文庫に保管されている. それを翻刻し考定して出版したのが本書である. 原本の写真版とその翻刻が載せられ, そこに記されている 445 種の植物が解説されている. 好道は独学で医学を勉強したと言う. 当然草木学の知識が必要となるが, 本草綱目啓蒙, 大和本草などをもとにして, 山県地方の植物を調べたのである. 薬用や食用などに関係するものが殆どであるが, 実際に自分で見聞し, また地元の人に聞いた事実を記しているのが特色である. また参考した本の誤りも指摘している. それがたくまげして地方の植物誌を作ることになっている. 江戸時代には各地にこのような研究者がいたのであろうと推測される. 埋もれていたその一端を明らかにしてくれたことは, 博物学の歴史の上でも貴重なものと思う. 地方の熱心な研究家が実地の検証から学問に寄与してくれていることは, 現在でも同じであるが, 江戸時代での事例を示してくれた. 本書の出版, 解説された, 故末田氏, 安藤氏, 広島市立図書館の方々の努力を多とする次第である. (山崎 敬)

□Lone F.A., Khan M. and Buth G.M.: *Palaeoethnobotany. Plants and Ancient Man in Kashmir*. 1993. 278 pp. A. A. Balkema, Rotterdam. ¥10,450.

カシミールの古代遺跡のうち, Burzahom と Semthan から得られた植物遺体の同定と, それらによる古植物環境の推論である. 年代は Burzahom では 2375 BC から 200 AD, Semthan では 1500 BC から 1000 AD にわたる. 2/3 以上のページを費やして, 同定形質の説明と得られた植物のリストおよびそれぞれについてのコメントが述べられている. 植物遺体は種子と材 (炭化物を含む) で, 主として形態と計測数値により特徴区分がされている. SEM 写真も多数示されているが, 紙質が合わないため不鮮明なのが惜しい. 古代のカシミールで利用されていた植物は, 木材や飼料植物のほか *Juglans regia* などは現地産であるが, 多くの有用植物は三つのルートもたらされたとしている. 西アジアのハラッパ文明からはオオムギ, コムギ, エンドウ, レンズマメ; 中央アジアからはアメンドウ, モモ, セイヨウアンズ, スズカケノキ, カラグワそれにおそらくキビ, ブドウが導入され; パンジャブや西北ヒマラヤはコメ, ツゲ, イチジク類がもたらされたとする. 種類の同定のみでなくその産出量から, それぞれの時代の農業形態の推定も行われている. その裏付けとして,